

いれずみ物語

— 24 —

小野 友道

スポーツ選手のいれずみ — 吉葉山の覚悟 —

新聞・テレビにスポーツ選手の勇姿が躍る。最近、とみにその身体にいれずみが垣間見える。例えば、2006年9月15日の読売新聞のスポーツ面に、リヨンで行われたサッカーの欧州チャンピオンリーグが報じられた。「俊輔日本人初ゴール」の見出しで、彼の写真が嬉しい。それに加えて、強豪リアル・マドリードがリヨンに完敗した記事が大きい。写真は戦い終わって、上半身裸で、交換したユニフォームを左肩に掛け、うつむいて引き揚げるリアルのカンナバーロ選手があった。期待され移籍してきた彼のその右上腕には、夕日に照らされていれずみが光っていた。

かように、外国スポーツ選手のいれずみが、毎日のようにテレビなどに登場する。NBA (National Basketball Association) などの試合には、いれずみをした逞しい腕が、激しく交差しながら躍動する。これでは若者がいれずみにあこがれるのも無理はない。特に、いわゆる格闘技のプロたちのいれずみはかなり目立つ。あの横綱を張っていた曙も、プロレスという商売柄か、太い腕にいれずみを入れた。いずれも、それは、見せるためのいれずみであり、ファッションとしての性格が強く、今までの日本人の秘匿のいれずみとは趣を異にする。

*

さて、いれずみに対する感覚は、国それぞれである。2002年の日韓共催サッカー・ワールドカップ開幕直前、英国外務省は日本への観戦旅行者への手引きを発表した(朝日新聞、2002年1月26日)。曰く「日本では、いれずみ見せるな、裸で寝るな、路上で寝るな」と。つまり、英国の男女に流行しているいれずみは「日本では犯罪者を連想させるので隠せ」と言っているのだ。ロンドンで若者が集まる街、カムデンの「いれずみ屋」の人気店オーナー、オルテガさん(36歳)は、自分も18歳からいれずみをし、背中にマリリン・モンローの似顔絵6つなどを彫っているが、その彼がロンドンではサッカーの元イングランド代表ベッカム選手の影響が大きいと述べている。ベッカムは背中や腕にいれずみがある。これらの話は東京新聞(2007年1月24日)の「タトゥー 遊び心刺激」と題したいれずみ特集の記事からであるが、モスクワ、台北、そしてマニラのタトゥー事情も掲載されている。台北では「紋身」とよばれるが、その店が100軒を下らない。やはり、ここでも芸能人やスポーツ選手の影響が大きいという。「カッコいい、おしゃれーという流行には違いないが、心のどこかに伝統から飛び出したい、



第43代横綱「吉葉山」

(昭和29年初場所)

佐藤三蔵著『大鍋子物語』

(横綱吉葉山秘話)より転載

(鹿屋体育大学附属図書館所蔵)

という気持ちもある」と報じている。いれずみを希望するのは、かえって女性に多いという。

なお、マニラもいれずみに寛容な都市であるが、日本人だけには、腕にタトゥーがあるだけで、「好ましからざる外国人と見なされ、空港で入国を拒否されるケースが年間500件」あるという。なんとも不思議な感じである。それほど日本人といれずみの組み合わせのイメージが国際的にも固定されてしまったのであろう。

ともかく、今後、ますます日本の若者の間でもファッションとしてのいれずみが定着していくのは間違いない。

*

しかし、同じスポーツ選手でも、国技の相撲においては、いれずみ力士はいないだろうし、おそらく許可されないであろう。しかし、かつて吉葉山の腕にいれずみがあったという話がある。吉葉山潤之助第43代横綱である。色白で市川右太衛門似の男前で、不知火型の土俵入りは見事であった。勉学を志して上京した上野駅で、間違われて高島部屋に連れて行かれ、そのまま入門したエピソードの持ち主である。初土俵は昭和12年、当初の四股名は、帯広の北海道製糖に勤めていた関係から「北糖山」であった。その翌年、虫垂炎の手術で命を助けてくれた医師吉葉庄作の恩に報いるため、四股名を吉

葉山に変えた。十両昇進を目前に軍隊に召集された。戦地で「大男が戦死し、異国の大地に転がっていたというのでは情けない」というわけで、その太く白い左腕に「吉葉山」のいれずみを彫った。支那で従軍したが、戦場に4年間、銃弾2発が彼に命中した。高島部屋には吉葉山死すとの報が入り、部屋の名簿からその名が消されていたという。それでも痩せこけた姿で何とか帰還できた吉葉山は相撲を続けることになる。しかし、あの覚悟のいれずみがあつては土俵には上がれないので、そのいれずみを電気こてで焼き消した。

昭和29年初場所、全勝優勝を果たし横綱へ昇進した。大雪の中の優勝パレードは北海道出身の吉葉山に真にふさわしいもので、沿道は熱狂的ファンで埋め尽くされたのを筆者もかすかに覚えている。

こんないれずみ物語が相撲界にあったのである。十両昇進直前に軍隊に取られた吉葉山が、おそらく生きて帰れまい、二度と相撲はとれないと、その腕に「吉葉山」を彫ったその心情、察するに余りある。

しかし、実は相撲といれずみの縁はまだあるのである。時代は遠く6世紀にまでさかのぼる。和歌山の井辺八幡山古墳から出土した「力士像埴輪」は高さ113cmの大きさがあり、腰

に禪を巻いている。両手を前に突き出した像は腰を落とし、その下半身は大きく、特にその大腿部は太く逞しい。お腹も力士の体形を思わせる。この力士の顔にいれずみがある。鼻を中心に両頬へ線刻が認められ、鳥が翼を広げたように見えると言われている。さらに、このいれずみは朱の顔料で塗られていたらしい。ところで、相撲と埴輪はいれずみとは別に深い関係が知られている。『日本書紀』に、ご存じ野見宿禰が當麻蹶早と相撲を取り、蹶早のあばら骨を折り腰を砕いて殺してしまった。その後宿禰は天皇に仕え土師の臣の祖となり、殉死の風習を埴輪をもって換える建議をなしたとある。それにしても、埴輪の力士の顔にいれずみが見られるその意義はなんだろうか。設楽は「三世紀の黥面絵画は非日常的な器物に描かれ、この世とあの世のような当時の人びとにとっての異次元空間の境界から多く出土することから、イレズミには寄り来る邪悪なものを防ぐことに大きな意義があった。……5～6世紀にも引き継がれる。古墳という典型的な結界に立てられた人物埴輪のうち、武人や盾持人に黥面埴輪が多いのは、亡き首長の霊に邪悪なものがとりつくのを恐れたからにはほかならない」と指摘している。いれずみ文化を考える上で、力士像埴輪のいれずみの存在は重要である。

さて、時代が変わって、相撲の国際化が著しい現在、いろんな改革も進むであろうが、背中に四股名や四文字熟語などを背負った相撲取りが、土俵に上がる時代が来るであろうか。いや、そうでなくとも、ファッションとして、ワンポイントのいれずみなら受け入れられる可能性があるだろうか。時代は思わぬ方向に、進むものである。そうであればあながち否定もできない。想像だけならそれも楽しいのだが。

ところで、青い柔道着で驚いてはいられないほど国際化した柔道ではどうであろうか。柔道の山下泰弘東海大学教授に直接きいたことがある。「日本人選手では見たことありませんね。でも、外国の選手には多くいますよ。規定ではいれずみの禁止事項はありません」そして、逆に、「あなたは どう思われますか」ときかれてしまった。「いや、難しいですね。でも日本の柔道の選手にはいれずみがあってほしくないで

すね」と私は答えたが、国際化の中で、今の若い選手がどう思っているだろうか。

医学部の同級生三根君は、ある都市の医師会長をしているが、1970年代、柔道の試合を見学したことがある。試合が始まって間もなく、主審が「それまで」と試合を止め、一方の選手に不戦勝を言い渡した。満場きよんとする中、その審判は、おもむろに「いれずみを入れているものには出場権はない。したがって不戦負けである」とのたもつた。場内は騒然となり「講道館柔道規則にいれずみに関する規定はない」ということになったが、議論の結果、主審の判断どおりになったという話をしてくれた。

*

ファッションとしてではない他の動機をうかがわせるいれずみも、スポーツ選手にみられる。ヤンキースの完全試合男ウェルズは、193cm、102キロの巨漢である。35歳のベテランの左腕が冴えわたるが、グローブをはめたその右腕に愛息の顔のいれずみがある。また、2005年に亡くなった母親のいれずみが背中にあるという。ベッカムも長男ブルックリンちゃんの名、「BROOKLYN」といれずみしている。彼は練習をサボって面倒を見るほどの子煩悩であると新聞は伝えている（熊本日日新聞、平成14年6月22日）。

スケートで金メダルを獲った清水宏保選手が、次のトリノオリンピック出場の際、足首に決意のいれずみを入れたというニュースがあった。強い期待感と絶頂期を過ぎたことへのプレッシャーがいれずみを彼に入れさせたのではないか。駅伝などでマジックなどで決意の文字をマジックインクで書く選手たちのそれもいじらしいが、同じ決意の表明であろう。

貴重なご教示をいただいた岩崎竹彦氏（熊本大学准教授五高記念館学芸員）ならびに同級生三根一乗医師に感謝する。

（熊本保健科学大学・学長）

文献

佐藤三蔵：『大鍋子物語』（横綱吉業山秘話）、松澤書店、1958。
設楽博己：『三国志がみた倭人たち－魏志倭人伝の考古学』、山川出版社、2001。
三根一乗：私信
<http://www.beemanet.com/essay/sumo/sumo1.html>
<http://homepage3.nifty.com/sumikocho/sakusaku/3-1.htm>
森 浩一：人物埴輪にみられる習俗の間、『井辺八幡山古墳』、和歌山県教育委員会、1972。
和歌山市立博物館：『和歌山市立博物館 総合案内』、和歌山市立博物館、1996。